

サ
ラ
ダ
キ
ヤ
ン
プ、
北
へ



井上光晴

北へ



サラダキャンプ、北へ

一九八七年七月二十日 初版第一刷発行

著者 井上光晴

装釘者 鈴木一誌

発行者 関根栄郷

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話 〇三(三三)七六五一(営業)

振替 東京六四二二二三

郵便番号 一〇一一九一
明和印刷／積信堂

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが、小社諸君係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

© Mituharu Inoue 1987 Printed in Japan

ISBN-480-80268-1 C0093

目 次

サラダキャンプ、北へ 3

1 笑う水兵

砂 9

笑う水兵 24

軍鶏タウチーモーター 45

ラーメンおじさん 67

降り積もるものがない町 85

2 静かな生活

海別へ 109

三浦海岸 130

静かな生活 154

「昭和遊撃隊」の夏 166

「ぴあ」を持つ男 182

サラダキャンプ、北へ

サラダキャンプ、北へ

斜里駅前のバス停留所に

「レンター寝袋」という奇妙な

ポスターが貼られている

海豹の海辺に黄色いテントを

張ろうとする男たちは手に手に

三分間の麺を抱え

北狐に似た顔の小柄な女が

食べたくもないキャンデーを口に

わけもなくはしゃぐ

サラダキャンプとは、二年前の夏から半年ばかり三浦海岸の空き倉庫を根城にした、性的アナーキストたちの共同生活様式に対して、ジャーナリズムの名付けた呼称で、房総半島の千倉や白浜に飛び火したあと、瞬くうちに各地にはびこるようになったのだ。キャンプの実態もさまざまで、性的な匂いのない無職者の集団から、老人ホームを離脱した人々まで、海岸の廃船や朽ちた舟小屋を選んでは「自由で野性的な生活」を営んだのであった。

はい、〈サーニンの情報〉行きます

間引かれたバスの遅れに耐えられず

髭面がギターを爪弾き

噎れた拍手の彼方に

海別の霧は青く湧き流れる

あんたと友達のはだかに

飛び交う虫

空色のパッケージには何も入っちゃいない

どうせ街角をちやかすファッションだよ

真珠は嫌いだよ、無性に

とてつもなく虫酸が走るわ

ガーリック通りにきてごらん

五〇パーセントオフの男ばかりさ

かび臭いオルガンはもう

誰かにあげよう

ごみ取りの車も持っていない

バラバッタを付録にして……

1

笑う水兵

彼が川浪ホテルに移ってきたのは、一九八五年八月三十一日であつた。わたしが日付まではつきり記憶しているのは、ちょうどその日に、ホテル居住者の葬儀を行っていたからである。前日の未明、ホテルと岬を挟んだ裏側の岩礁に打ちあげられた死体の名は生田小太郎。明らかに自ら生き絶えたのだと思われたが、遺書もないところから、表向きの処理がなされたのだ。受付の椅子に坐っているわたしに、まず手洗所のありかをきき、手を拭きながら戻つてくると、中旅修治はあけすけな口調で「こういう日に死ぬと、みんなが迷惑しますね」といった。それからほぼ一年のあいだに、ホテルの居住者たちは、まったく彼の言動に振り回されたといいてもよい。六十五歳以上の年齢と定額前納金を入居の条件とする川浪ホテルは、いわば新形式の老人ホームといつてもよかつたが、夫婦部屋と個室を合わせた三階の建物に、七十人近

くの男女が生活していた。

そこで庶務係の名目を与えられているわたし自身も、初めは正当なホテルの滞在人であった。海の家を共同経営にしようという甘言に乗せられて有金全部を捲き上げられ、ホテルにも居辛くなった時、今は亡き創設者に手を差し延べて貰ったのだ。

中旅修治が最初に自己の存在を印象づけたのは、ホテルに入居して間もなく、月に一度行われる誕生パーティの席上であった。九月の月には二人の該当者しかおらず、何となく盛り上がり欠ける夕食会だったが、夫婦者のひとりにおくられた小さなガラスの花瓶をめぐってトラブルが発生したのである。

古い年代の長崎ビードロだと説明する男の言葉が終りもしないうちに、「そんなもの、あなたにプレゼントされるいわれはないよ」という声が飛んで、人々は固唾をのんだ。

「そういういい方はないでしょう。民子さんに差上げたんだ、僕は。あなたにじゃない。……僕にとって、いちばん大切なギヤマンをプレゼントするのに、それこそあなたに拒絶されるいわれはないはずだ。……」

「どうしていわれがないんだ。民子は僕の妻だよ。……そんな筋道の立たない品物を貰う理由は何処にもない。……それに、自分のいちばん大切なギヤマンとは何といういい草だい。いけしゃあしゃあと、開き直るのはよせ。……」

「あなた、変だわ」

「開き直るって、何だい。わからないよ、いつてることが。……」

殆ど同時にでた藤井民子とオメガの声を、夫々のテーブルに坐る誰彼は、恐らく狂言の幕開きでも見るような思いできいたろう。藤井誠の妻民子と白石住男のあいだにおける殊更の親密さは、とうにホテル全体の噂になっていたのだ。

「失礼だわ、あなた。白石さんに謝って頂戴」

「何を謝れというんだい、盗っ人に」

「盗っ人は君の方だろう。戦時中、タイやフィリッピンから運びだした仏像だけでも大変な数じゃないのか」

「それはなしよ、白石さん」民子はひきつった顔を立っている男に向けた。

「きき捨てならないことをいうんだね」藤井誠は相手を見据えた。「誰の入れ智恵か知らないが、タイの仏像を盗んだという証拠があれば、見せて貰いましょうか。……」

「ストップ」という声は、その時わたしの横合いからでた。集中する視線の中を、中旅修治はゆっくりとした様子で、民子の傍に立った。そしてテーブルにおかれた長崎ビードロの花瓶を自分の目先に掲げながら、こういったのだ。

「奥さん、あなたはむしろ主人を愛していますね」